

かけはし

静岡大学 教育学研究科
教職大学院
NEWSLETTER

No. 4

2017年3月4日

静岡大学教育学研究科・教職大学院 〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836 TEL 054-258-4701(山口研) URL <http://www.dapse.ed.shizuoka.ac.jp/>

巻頭言

以前上司からこんな話を聞いたことがあります。「中学校の先生、忙しいよねえ。中学の校長の時、数学のおもしろい本があったので、数学の先生に『これおもしろいよ、読んでみたら。』と言って貸してあげたんだよ。その本、半年以上経って僕がその学校を去る時に、『すみません。読めませんでした。』って返って来たよ。」その上司は、数学の先生で、高校の校長から交流人事で中学校の校長を務められた方でしたが、中学校教員の不勉強を責めるような言い方ではなく、その激務ぶりに同情的でした。

私はそのお話を伺いながら、自分もそうだったなあと思い起こしました。明日の授業の準備、行事の計画、会議の提案資料づくり、さまざまな報告書、部活動の練習や、対外試合、そうしたことに追まわれ、本を開くことといえば、研究授業の指導案の参考図書が精々といった感じでした。そんな毎日の中で、日々の実践や、その時々先輩や同僚から学ぶことももちろん多くありましたが、いろいろな考え方や、理論を知り、自分の考えをまとめるということはなかなか困難だったように思います。

教育哲学者の小玉重夫さんは著書の中で、公教育の教師には、「中斷のペダゴジー」が必要だと言っています(2013 ちくま新書)。学習指導要領の撤廃などという過激なことはもちろん、「教育の再政治化」とか「カリキュラムの市民化」という難しいことはさておき、教職生活の中の一時期、日々の業務から離れて、今までの教育活動を見直すとか、自分の取り組んできた仕事を省みたり、価値づけたりすることの必要性には賛同できるような気がします。また、何かをじっくり学び直してみることも、教職生涯をより豊かにしてくれ

教職大学院生に期待すること

渡邊 聡

(静岡県校長会会長 牧之原市立榛原中学校校長) ことでしょう。こうしたことは、教職員のリーダーに求められる「視野の広さ」にもつながるはずですが、教職大学院に在籍されている現職院生の皆さんは、まさしく「中斷のペダゴジー」を与えられたわけです。それは、皆さんの現場での職務遂行ぶりが評価され、将来のリーダーとして期待されているからにはほかなりません。

皆さんが教職大学院で学ばれていることは、その後の職務に直接活用できるものばかりではないかもしれませんが、有名なジャーナリストの池上彰さんは、「すぐ役に立つことは、すぐ役に立たなくなる」と言っています。直接職務に関わることに限らず、多くのことを学ばれ、引き出しをたくさん増やし、教師としてだけでなく、人間として一層の魅力を身につけ、求心力を持った、これからの教育を担うリーダーとして活躍されることを期待します。貴重な頼れる戦力である皆さんを、涙をのんで送り出した皆さんの在籍校のすべての校長はそう願っているはずですが。

本稿では、現職院生の皆さんに期待することを述べさせていただきました。その一方で、現職院生との議論やその姿に接することが、学部卒院生の皆さんにとって、文献や講義からだけでは得られない、採用後に生きる何かを掴むきっかけになれば、それもまた教職大学院の大きな存在意義であると思います。



成果報告書テーマ・静岡大学教職大学院での2年間を振り返って

【学校組織開発領域】

中学生を対象とした「聞くこと」「話すこと」に関する英語モジュール学習の実践的研究

「自律的な学習者としての教員」これが、私が教職大学院でさらに高められた姿勢です。4領域に関する学びがきっかけとなり、様々な分野に関する文献に当たりました。二百冊の書籍と数十の論文を読破できたことは一生の財産です。子どもたちの笑顔のため、邁進していきます。

梅田 晃

地域の教育支援と学校改善に関する試論—掛川市放課後子ども教室「はぐくらぶ」を事例として—

「地域の教育支援と学校改善」という研究テーマで、教育界を俯瞰し社会の様々な教育支援を学ぶことで「学校は子どもの学びの総体の一部分である」ということを実感しました。この成果を今後の地域学校協働活動の質的向上や学校改善につなげていきたいです。

澤瀬 崇

教育観を生かした学校づくり—思いを「見える化」し「共有」するための実践—

自分が何のために教員になったのかを改めて考えさせられる2年間でした。多角的に物事を見る力がつき、これから必要とされる学校づくり、組織運営の在り方について、様々な理論をもとに考えるようになりました。省察や人との繋がり的重要性を実感しています。

鈴木 拓史

高等学校におけるSGH施策の進行とその効果に関する研究—SGH指定校におけるアクティブ・ラーニング学習の充実を視点として—

学校現場から離れて、学校教育を俯瞰して見る機会を多く与えていただきました。これまでの個人の実践を大学院で学んだ理論と融合させることで一般化し、先生方と共有することが大切だと感じるようになりました。この2年間の様々な出会いに感謝しています。

福元 英美



【教育方法開発領域】

生徒の主体性・協働性を引き出す音楽科における鑑賞授業の開発

素晴らしい先生方や、仲間と出会うことができ、とても充実した2年間になりました。今までの教職経験と大学院での理論に基づいた学びを生かして、子どもの主体性と協働性を意識した鑑賞授業の研究に取り組み、自身の授業観の変容につなげることができました。

小林 藍子

小学校国語科における読解方略習得のための授業づくり—文学的文章に焦点をあてて—

私は、講義から多くの知識を得ると共に、個人の経験や学校が抱える課題を理論によって整理し、議論を通して他者と共有する大切さを学びました。今後は、これまで以上に子どもたちが学ぶ実感を味わう授業づくりを目指し、同僚と共に学んでいきたいと思っています。

鈴木 崇浩

国語科単元構想の開発過程における実践的知識の解明と実践の評価

教職大学院での講義、演習では、今までの教職経験を振り返り、改めて意味づけ、理論づけをすることができました。さらに、国語の授業づくりについての研究にじっくり取り組むことができ、授業に対する意識が確実に変わりました。今後学んだことを生かしていきます。

高木 由香

深い学びを意識した主体的・対話的な授業開発

2年間を振り返り、感じたことは学校現場に出る前にこの場で学べてよかったということです。「教師」というものを対生徒、対保護者、対地域などと様々な視点から深く考えることが出来ました。この学びを活かし、これから精進していきたいと思っています。

西谷 聡一郎



小学校における英語の教科化に向けての試行 —小学校教員への質問紙調査と文字指導—

以前は、授業や学級経営において、1つの考え方や方略にこだわっていたように思います。大学院で国語と外国語活動の研究を進める中で、正解は1つではなく、多くの指導法の明と暗を理解した上で、必要なものを選択することが大切だと気付きました。

八木橋 秀夫

【生徒指導支援領域】

生徒の積極的授業参加行動を引き出すための教師の工夫と支援

ストマスとしてこの2年間を過ごしましたが、本当に良い経験をさせてもらったと思います。実習として約1年半同じ学校に携わらせてもらったことなど、様々な貴重な経験ができました。講義も含め、教師を志す者としてありがたい2年間でした。相磯 知宏「共生」社会を形成する市民の育成に向けて—対話の中で考えを深める道徳授業プランの提案—

大学院への一番の感謝は「教育」や「学ぶこと」にどれほどの価値があるかを再認識できたことです。そして、知りたいことに近づくためには、専門領域だけでなく、視野を広げ、他領域に目を向けると学びの糸口と面白さがあることに気付く機会を得たことです。

大村 愛

学校適応に課題のある新入学児童への支援過程 —多面的な見立てとチーム支援の効果—

学校教育が抱える課題や自身のこれまでの経験を理論と結び付けてとらえ直すことで、新たな課題を発見できました。各分野の専門家である先生方や様々な経験をもつ院生仲間から多くの学びと刺激をいただき、充実した2年間を過ごすことができました。

杉崎 ことみ

学校適応に課題を抱えた生徒との関係づくりの過程分析と校内支援ネットワーク構築の可能性の検討

「問題行動は必要行動」「問題は見ようとしなければ見えない」…大学院での2年間の学びは、問題を自身の目に見える直線的な因果関係だけで捉えるのではなく、その背景にある相互作用や関係性に着目し、分析するための理論的枠組みと気づきを与えてくれました。

鈴木 友子



教室に入れない女子生徒との関係づくりのプロセス —支援者の役割に着目して—

「帰りの会で言ってやる」小学校の頃よく耳にしていたこの言葉を、大学院ではよく思い出していました。泣きながら思いを告げた小学生のように心で話さなくては、と。知識や経験で飾っても美しくないのだ、と。大学院の学びに溺れないように生きていきたいです。

長井 亮太

コミュニケーション活動がもたらす生徒と教師の変容 —グループアプローチの視点から—

あつという間の2年間でしたが、教職大学院在学中でも、現場に戻っても、共通して大事なことは、主に3つあると思いました。当たり前かもしれませんが「俯瞰すること」「学び、アップデートし続けること」「理論と実践の橋渡し役をすること」です。廣田 憲一若手小学校教員の学級経営力向上のための支援の在り方を探る—メンタリングを通じた課題解決力の促進—

12年間、現場で教員をやってきて一通り仕事が終わっているつもりでしたが、大学院に来てこれまでの現場での勉強不足に気付きました。大学院での学びを生かし、より広い視点から実践を振り返り、学び続けながらよりよい教育を追求していきます。松岡 龍吾

【特別支援教育領域】

吃音のある児童への指導・支援の在り方

初めは環境の変化に慣れるのが大変でしたが、現職の先生方とともに学ぶことで、教職に対する意識や考え方を深めることができました。来年度から教員生活が始まります。この大学院で学んだことを胸に励んでいきたいです。

植田 康頌

インクルーシブ教育における特別な教育的ニーズのある子どもを支える早期移行支援の在り方—対話による連携を目指して—

文科省特支調査官である田中氏は、教育の質を上げるためには、連携が重要であることを述べ、そのヒントとして Research, Target, Outreach を挙げています。それは、教職大学院での2年間の学びそのものであったと考えます。今後は学校現場で、学び続ける教師の渦を作っていきたいです。

小林 宏美



放課後子ども教室における特別支援教育の在り方について—子ども・地域住民・教師との関わりを通して—

私にとってこの2年間は、様々な広がりや繋がりを得ることができた素敵な時間でした。今まで知らなかったたくさんの学びによる知識の広がり、大学生・大学院生や先生方、実習先でお世話になった人たちとの繋がりを今後も大切にしていきたいと思えます。

田中 礼子

特別支援教育コーディネーターによる校内支援充実に
向けた取り組み—SDQの活用を通して—

教員だけでは得ることができない多くの学びがありました。教育関係や各種の専門家から教育の大切さを改めて学ばせていただき、「無知の知」であることを知りました。それが今後の財産になりました。

中野 朋慶

情動調整に視点を当てることによる、教育的ニーズのある子どもたちのアクティブエンゲージメントに与える効果—SCERTSモデルの活用を通して—

私は特別支援教育のみならず、学校組織、教育方法開発、生徒指導と各領域の授業を通して学校教育を広い視点から学ぶことができました。これからも学び続ける教師として日々の実践に取り組んでいきたいと思います。

深澤 雄紀

通級指導教室における発達障害をもつ児童の指導

自分の周りに同じ生徒として学ぶ現職の先生方がいらっしやったり、継続して同じ実習先に通ったりすることで、教育現場の現状について学ぶことができました。学部時代にやりたかったけれどできなかったことをたくさん経験できました。

安岡 志織

第3回生徒指導支援領域主催修了生・現役生合同研修会

岡本 小泉 深谷

2月10日に静岡市立南中学校を会場に、『第3回生徒指導支援領域主催修了生・現役生合同研修会』が開かれました。今年度で退官される石田純夫特任教授と藤浪万知子教諭（6期修了生）のTTによる道徳授業を参観しました。「道徳の教科化に向けて「総合的道徳授業」実践—教科授業を加味した“アクティブラーニング”の試案—」と銘打った授業は、5時間で道徳の単元を構成したものです。生徒は、第1時で、「瑠璃色の地球」という曲を聴き、歌詞を見ながらリレーでCDラベルに絵を描きました。第2・3時では、ロールレタリングの手法を用い、曲のイメージから誰かに手紙を書き、その手紙に自分あての返事を書く活動を行いました。第4・5時では、曲のイメージからグループで創作演技を考え発表をする構成です。

事後研修では、授業者から、手紙やその返事を書く活動では、自分の内面を見つめる生徒の様子や、生徒たちから「練習時間が欲しい」「BGMが欲しい」などと要求があり、主体的に取り組んでいたことが報告されました。また、ロールレタリングや創作演技の活用の仕方・効果について話し合いました。

情報交換・意見交換の時間では、修了生から、教職大学院の学びを生かして自分の実践について変わったことや、今後の現場と教職大学院の連携の在り方について話題提供をして頂きました。領域を問わず、修了生・現役院生が顔を合わせ、交流する有意義な時間をもつことができました。

発行責任者	専攻長	山崎 保寿	編集後記 今年度よりの試みでしたが、紙面を通し、多くの方々のご協力のもと、実践や学びをつなぐ場となったと思います。ありがとうございます。（伊藤） 「かけはし」の最初の年に編集に関われたことを、とても嬉しく思います。ありがとうございました。（臼井） 「かけはし」の編集を通し、学校現場や修了生の方とつながることができてうれしく思いました。（深谷） 様々な方々につながることで、授業で得られる学びとは違う学びがありました。貴重な時間でした。（水野） 来年度へ向けて準備の時期となりました。子どもたちとの関わりから多くを学んでいきたいです。（芦澤） 来年度以降も、このニューズレターが学校現場と教職大学院をつなぐ「かけはし」となれば幸いです。（萩原）
監修	担当教員	山口 久芳	
顧問	M2 代表	松岡 龍吾	
編集長	M1	伊藤 智美	
副編集長	M1	臼井 秀明	
	M1	深谷 陽平	
	M1	水野 靖弘	
	ストレートマスター	芦澤 優樹	
	ストレートマスター	萩原 万葉	
発行担当領域（生徒指導支援領域） 岡本 曜 小泉 亘 酒師 直道			

題字 ストレートマスター 北住 美来

次号発行予定は 平成29年7月です

